

シーズ発掘 ・ ニーズ把握

シーズ情報の発信

地域産業を基盤とした研究会立上げ

キーワード：連携推進の場・ものづくり・イノベーション・ソリューション

本事例の関係者

群馬大学
教員
専任教員
共同研究イノベ
ーションセンター
文部科学省産学官連携
コーディネーター

産学連携を推進する「場」の創出

【要約】

共同研究イノベーションセンターは、専任教員とコーディネーターが主体となって産学連携に係る様々な技術分野の研究会を企画・立案・設立してきている。これらの研究会は、産業界・自治体・行政等の関係者が集う地域産業を基盤にした「産学官連携推進の場」を形成し、連携を媒介する「知」と「人」の双方向交流により、イノベーション創出を図ってきた。この研究会の存続には、参加者にソリューションを提供できることが条件であるが、時間の経過と共にソリューションが枯渇して行くことは免れない。そこでコーディネーターは、専任教員と共に年度の経過に合わせ、時宜に適ったテーマを持つ研究会を順次に立上げることとし、現在までに15研究会を設立・運営してきた。教員を中心とした研究会活動を支援することにより、地域内の経済・社会の活性化を進め地域振興に貢献している。

【きっかけ】

群馬県は、自動車・電機・機械金属製造業を基盤とした高い産業集積を有する。しかし、経済のグローバル競争の激化や、国外への大手企業の事業所移転に伴い、地域企業のものづくりに発揮されるオンリーワン技術が死蔵する状況に至っている。コーディネーターと専任教員は、地域企業が抱える技術課題を対象にした研究会を設立・運営し、地域企業の固有技術の発展をはかることにした。

【段取り・プロセス】

研究会の形成過程では、地域企業が保有する固有技術の強み・特徴・潜在力を高め、時宜に適ったテーマを持つ研究会に限定し、研究会の運営は可能な限り教員の意向を反映させることにした。

【成果・結果や活動後の変化】

専任教員とコーディネーターは、年度の経過に合わせ、時宜に適ったテーマを持つ研究会を順次に企画・立案し、現在までに15研究会を立上げ・運営してきた(図1)。

平成15年度に立上げた中国ビジネス研究会では、12回の研究会を開催し、外部から33名の講演者を迎え、会員、中国の大学、企業、及び行政機関関係者との交流を深めてきた。平成16年度から継続開講している起業塾では、4人の塾生が起業したベンチャー企業を支援している。平成20年度は、本学の独創的研究会である「プラスチック材料成形加工研究会」、「カーボン材料創成研究会」、「ファイブバイオプロセス研究会」等の4研究会を立上げ地域振興を進めている。

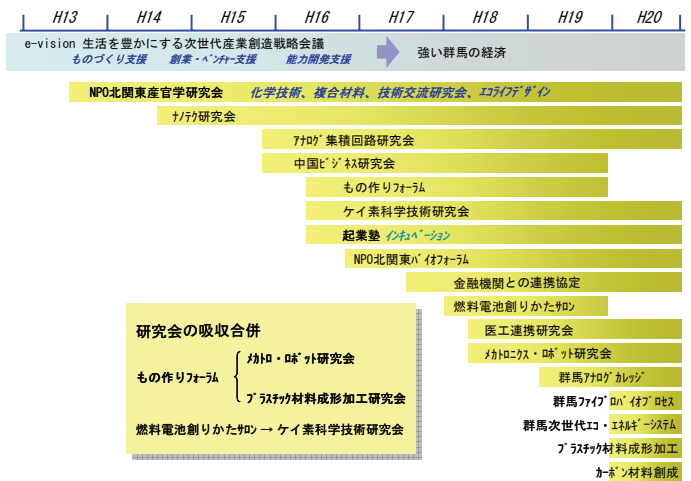


図1 群馬大学発信の産学官連携研究会と県の産業政策

「カーボン材料創成研究会」キックオフ会議
開催日：平成21年2月2日(月) 14時スタート
場所：群馬大学工学部総合研究棟402教室

プログラム

14:00~14:10	会長挨拶	
14:10~14:20	群馬大学大学院工学研究科長	宝田 恭之
14:20~14:25	学長挨拶	
14:25~14:35	群馬大学	学長 鈴木 守
14:35~14:45	次長挨拶	
14:45~14:55	群馬県群馬産業技術センター	副所長 眞下 寛治 氏

立上げたカーボン材料創成研究会

立上げ研究会件数

- H15年度：2件
- H16年度：4件
- H17年度：1件
- H18年度：3件
- H19年度：1件
- H20年度：4件

その他の成果

起業塾より4社
起業(塾生4人)

成功の事例

教員が積極的にアピールを行うことが第一

●教員の熱意がトリガーとなり、学生や企業技術者が入会する研究会が誕生

【研究会発足事例：プラスチック材料成形加工
研究会：H20年11月27日キックオフ】

群馬県は金型やプラスチックの生産基地であり、高いものづくり技術に支えられている。しかし、プラスチック成形技術は機械系技術者が担当しているのが現状である。K教授は、新しい高分子材料の応用やプラスチック技術の向上には、高分子の基礎から応用に至る技術の開発能力を高めることが必要であると訴えていた。この熱意により、K教員、センターの専任教員及びコーディネーターは、高分子材料工学と機械工学を融合させた、新規のプラスチック材料成形加工研究会を企画・設立し、キックオフ研究会を開催した。研究会の設立の趣旨に賛同した学生や企業の技術者からなる多くの参加者をむかえ、研究会は大成功であった。

プラスチック材料成形加工研究会

◆と き 平成20年11月27日(木) 13:00~
◆と ころ 太田商工会議所(太田市浜町3番6号)
◆参加費 1,000円

本研究会は、機械工学(金型)を中心に、成型やプラスチック、電気機械部品の成形で得られる、最新のプラスチック材料の活用を目的とする。この研究会は、高いものづくり技術を支えている。研究会の目的は、最新の成形技術に関する知識を習得し、プラスチックの活用を促進することである。また、新しい高分子材料の活用を促進し、製品の改良や新製品の開発に貢献することである。

◆プログラム
1. 13:00~14:00
基幹講演 「プラスチック材料成形加工研究会設立について」
群馬大学大学院理工学専攻 教授 藤原 孝志 氏
2. 14:00~14:45
招待講演 「ユーザー側から見た自動車材料」(依頼)
富士通(株) 丸山 茂樹 氏

図 2 プラスチック材料成形加工研究会のキックオフ

シーズ発掘 ・ ニーズ把握



プラスチックの不思議を実演するK教員

失敗の事例

新たな研究会設立のサイクルを回す際の課題

●ソリューション提供の持続が研究会の寿命を左右する

研究会が存続して行くためには、時宜に適ったソリューションを参加者に提供できることが必須である。ソリューションが尽きたとき、その研究会に寿命が訪れ消滅に至る。現に、設立から長く時間の経過した研究会は、活動が休止状態にあり、実体が伴っていない。これは、コーディネーターが、消滅の時期を予測できず、時宜に合致・代替できる研究会を設立するというサイクルを回すことができなかった失敗事例である。

●弛まない研究シーズ探索活動と時宜に適った研究テーマを見出す目利きの要請

時宜に合致した研究会の設立を行わず、更にその設立のサイクルを回すことができなければ、研究会活動を継続することはできず、「知」と「人」の双方向活動は中断し、イノベーションの創出も期待できない。従って、研究会の設立サイクルを回すためには研究シーズの弛まない探索活動と、時宜に適った本学の独自のコアとなる研究テーマを見出す目利きが求められる。

成功と失敗の 分かれ道

研究会の存続は、ソリューションの枯渇する時期予測の見極めが重要になる。ソリューションが尽きる前に時宜に適った新規研究会の立上げが必要である。

産学官連携の新たな展開に向けた提言

コーディネーターが意思疎通を図る仲介者

●研究会活動は「知」と「人」の双方向交流を産みイノベーションを創出

研究会の設立後、時間の経過に伴い、研究会が参加者に提供する多くのノウハウや知見が風化していく。このような風化は、研究会の参加教員への激励、運営の合理化等を進めることで、ある程度の存続期間を延長することはできる。しかし、今日の日進月歩の科学技術の世界では、参加者へのソリューション提供期間が短縮化し、提供できるコンテンツが減少することは免れない。そこで活動の休止状態にある研究会に関しては、次のように対処する。

①その研究会テーマを包含する既設の研究会に吸収合併させる

②その研究会を代替・後継する、時宜に適った新規テーマの研究会を設立する研究会の吸収合併・新規設立等というサイクルを回すために、コーディネーターは研究会の継がせる側と継ぐ側の両者に跨る媒介者となり、研究会の「知」と「人」の双方向交流を継続推進していく。

☆コーディネーターの一言

ソリューションの尽きた研究会を立て直すのではなく、新たな研究へ挑戦する新規の研究会を設立するために、研究会を継がせる側と継ぐ側の両側に跨るCDが、唯一の研究会設立のサイクルを回す媒介者になる。